

## はじめに 駅名標は未知の土地への案内人

東京の都心近くに住んでいた頃、上野駅から常磐線で出来るだけ長く乗っていただける列車で旅することを思いついた。

常磐線には、当時、他の路線にない独特のルールがあった。それは、中距離列車を「普通」、短距離区間を走る列車を「快速」と呼んでいたのである。ホームに停車する普通列車は、日ごろ利用する区間では見ることのない駅名が行き先に掲げられていた。土浦、水戸、勝田、日立、高萩、大津港、いわき、四ッ倉、久ノ浜、原ノ町。あとへ行くほど、全く想像のつかない未知の世界だった。文字ばかりが遠くであることを示している。それだけに、内照式の方向幕の、後ろから蛍光灯に照らされ浮かぶ白地に黒い駅名の文字は、異様なほどに惹きつけられるものとして記憶に残った。

いつか行ってみたい。それら駅名をそぞろに見ながら招かれる日々を過ごすうち、いわき行きの普通列車に乗り込んだ。

上野駅を離れ、長い時間、座って行き過ぎる景色を見ている。その間にも、列車は一駅ずつ律義に停まっていく。ホームに立つ駅名標に、上野から遠ざかるほ

ど見たことのない文字が次々と現れた。神立(かんだつ)、佐和(さわ)、大甕(おおみか)など、由緒ありげな名前は読みを当てるのが難しい。

駅の片隅に、日差しを浴びたまま、昔の面影を留めた古いかたちの駅名標を見ることがあった。普段、目にする、すっきりと整った漢字やひらがな、ローマ字にコーポレートカラーを配した洗練されたそれとは違う。上野駅でいつも眺めていた、あの行き先の文字に再び行き会ったような、そんな親しみの湧く手書きの文字である。それが国鉄時代の書体、すみ丸ゴシックだと後に知るようになる。

国鉄の文字として定められたすみ丸ゴシックは、当時五千三百駅近くあった国鉄の駅で、およそ三十年にわたり使われた。北は稚内駅から南は枕崎駅まで、どこへ行っても同じ書体が駅で出迎えてくれたのである。

けれども、統一書体でありながら手書きであるが故に、駅により微妙に異なるかたちをしていた。それが、時に懐かしさや新鮮な印象を与え、親しまれる要素ともなっていた。

文字に誘われ出かけて、文字からは想像もしなかつた風景に出会う。文字にまたイメージが加わり、それが新しい記憶として刻まれる。一見、なんの変哲もないような鉄道の文字を、一つずつたずねながら、その源流にあふれる魅力を探っていくことにしよう。

